

## ナラティブと現場性

小田 博志\*

### Narrative and Its Situatedness

\*Hiroshi Oda, Dr.sc.hum.

\*Hokkaido University

#### キーワード

現場性 genbasei, situatedness

他者 others

想像力 imagination

アクチュアリティ actuality

偶発性 contingency

### I. 現場に身を置いた思考

「わたしたちも手探りで見つけたんですよ。日本でも何か探したら見つかるでしょう。」

これはドイツ西部のルール工業地帯にある町で、2003年に一人の牧師さんが私に語った言葉である。

ことは1983年にまでさかのぼる。あるトルコ人女性がこの牧師さんに救いを求めてきた。この町はトルコ系の移民労働者（いわゆるガストアルバイター）が多い。この女性はある移民労働者の妻としてトルコから呼び寄せられ、すでに約10年ドイツで暮らしてきた。その間に子どももできて、生活の基盤はドイツに移っていた。そんな矢先、夫が交通事故で死亡した。この当時、労働ビザは労働者本人に対してのみ付与されていた。だからその当人が死亡すればビザは無効となり、同居する家族の在留資格

---

\*北海道大学大学院文学研究科

も失われてしまうことになった。そのため行政当局は、この女性と子どもたちにトルコへの帰国を命じた。トルコ人女性の側は、すでに自分たちはドイツのこの町に根を下ろして、特にドイツで生まれ育った子どもたちはトルコ語を喋れないという問題がある。また、もし帰国すれば自分は向こうの父が決めた男性と無理やり結婚させられそうだ。だからあくまでもドイツでの生活を続けたいと願った。そして帰国の命令に応じなかった。そこで当局側はこのトルコ人家族の強制送還に踏み切ろうとしていた。この差し迫った状況の中で、トルコ人女性はその牧師さんの前に現れたのである。

手をこまねいていれば強制送還されてしまう。しかし法的には、この家族がドイツに留まる資格はもはやない。どうすればよいのか。そのときこの牧師さんは、この家族を教会の敷地内にある牧師邸に住ませることにした。そしてその間、行政当局と折衝を行い、人道的理由からの在留資格を得ることに成功した。

ちょうど同じ年に、ベルリンでも、退去強制が迫ったパレスチナ難民を教会関係の建物内で保護するということがあった。この場合も在留資格獲得に成功した。その後、在留資格をもたない外国人を、キリスト教会の敷地内で保護する動きは、ドイツ全国規模に広まった。今日では、これは「教会アジールKirchenasyl」運動と名づけられ、社会の中で一定の位置づけを得るにいたっている。

アジールAsylとは聖域、避難所、庇護などを意味する言葉である。キリスト教会が逃亡してきた人間を庇護し、世俗権力に引き渡さないという権利は、中世ヨーロッパでは普通に認められていた。しかし国家の中央集権化の中で、キリスト教会の庇護権は次第に剥奪されていった。特に近代法治国家では、法が及ばない空間が国境内に原理的にあつてはならない。だから理論的に言って、「不法」残留化した外国人に逃げ場はない。ところが、上のトルコ人家族の場合、警察は彼らが牧師邸にいることを知っていたにも関わらず踏み込んで拘束しなかった。この点だけ見れば、あたかも中世の教会のアジールが、現代ドイツで復活したかのように思われる。

合法的な在留が受入国の政府によって認められないが、本国に帰ると非人道的な運命が待ち受けている可能性の高い外国人。そういう人びとは、日本にも少なからず存在している。特に問題なのは、本国で政治的迫害を受けるおそれが強いのに、日本で難民と認められず退去強制が迫られる外国人、つまり「難民と認められない難民」である。こういう人たちも、日本では「不法残留者」として入管施設に収容され、送還されてしまうことが多い。こういう人たちが出てくることは、今日の難民認定制度の

中では避けられない。難民が自らの迫害の「証拠文書」を用意して出国できる可能性などほぼない。その点で彼らはまず不利な立場に置かれている。当局の担当者は難民認定の現場で、難民申請者のナラティブを聞いて、迫害の有無を判断しようとする。そこには担当者の恣意が入り込む余地がかなりある。少しの日付の言い間違いで、ナラティブ全体の信憑性が否認されるということも起こり得る。難民申請者のナラティブには疑いのまなざしが向けられる。その疑いは時として致命的な結果につながりかねない。

日本には「難民と認められない難民」を保護する教会がない。だからドイツの教会アジールのことを調べても、日本でそのまま応用できない。そのことを上の牧師さんに言ったときの返答が、冒頭で引用した言葉だったのである。

私が牧師さんに言ったことと、牧師さんの返答との間にはズレがある。それは何か。牧師さんは、強制送還が迫った外国人をどうやって守るか、という差し迫った状況、つまり「現場」に身を置いて、上の返答をした。そのアクチュアルな状況＝現場において、教会を使うかどうかは自明の選択肢ではなかった。先例も無く、成功の保証も無い、一種の賭けだった。決まったこととしてではなく、即興的に、戦術的に (de Certeau 1974)、教会の敷地といういわば「資源」を、直面する問題のために用いたのだ。一方で、私の言葉は、教会アジールをすでに実施され、形になったものとして捉えている。私は教会アジールを、外国人を守るという課題に対する実践の現場のただ中に位置づけるのではなく、すでにそれが行われてしまった後の現場外在的な視点から見ていた。

もしこの牧師さんが、教会を資源として使えない状況に置かれていたら、別の手段を取ったかもしれない。日本的状況では、教会とは別の資源があるかもしれない。現場内在的立場に立つならば、教会アジールの本質は、教会を使ったという結果にあるのではなく、そこまでにいたった実践の仕方、資源の使い方、つまり「現場におけるものごとのやり方」にあるのだということになる。現場外在的な視点からは教会アジールの調査結果は、日本では役に立たないように見える。しかし現場内在的な、すなわち現場に身を置いた思考をすれば、教会が使えるかどうかとは関係なく、教会アジール実践者たちの「もののやり方 arts de faire」(de Certeau 1974) から学び、それを同じ問題に直面した別の文脈でも応用できるようになるであろう。

## II. ナラティブに対する2つのモード

教会アジールの事例の考察から、現場外在性と現場内在性という2つの立場を取り出した。この立場の違いは、ナラティブに対しても当てはめることができる。ナラティブを、すでに語られたものとして、すなわち「データ」として扱う立場と、ナラティブがまさに語られ／聴かれている現場、ナラティブが生成する現場に身を置く立場との違いである。言い換えると、これは、「対象としてのナラティブ」を見るか、「行為としてのナラティブ」に関与するか、また、ナラティブをすでに形になったものとして捉えるか、生み出されていくプロセスとして捉えるか、の違いでもある。

ナラティブとは社会的な実践である。ある具体的な時と場において、具体的な誰かに対して語られるものである。現場のナラティブには台本がない。即興的であり、中絶、脱線、言い間違い、矛盾がつきまとう。それはまた、語りをはじめたときには思ってもいなかった、創造的な思いつきが、語る最中に出てくることをも意味する。ナラティブとは語り手個人が作るのではなく、語り手と聴き手の共同作業の中から生まれてくる。つまりナラティブの発生源は個人ではなく、人と人との関係性である。あるナラティブが語られ、聴かれる「今」に身を置いてみよう。その「今」とは、「すでに語られたこと」の確定性と、「これからどのように進んでいくのだろう」という不確定性とのあいだで経験される、ある種の緊張の場ではないであろうか。「それでどうなったの？」という聴き手の促しは、ナラティブがまさにつむがれている「今」において発せられる言葉である。

この事情は、調査技法としてのナラティブ・インタビューでも同じである。調査の現場において、調査者は語り手と「今」を共有する（Fabian 1983のいう「同時代性／時間共有性coevalness」）。語りの促しとなる導入質問を向けた後は、話がどのような展開を辿るのか、調査者には（多くの場合は語り手にも）わからない。この「これからどうなるのかわからない」もしくは「何が起こるかかわからない」という「偶発性contingency」の経験は、現場のナラティブの重要な特徴である。だからこそ、聴き手は、話を聴いていく中で、驚き、発見、感動、あるいは違和感、つまりは「他者性」を経験するのである。ナラティブはこの偶発性を含みこんでいる点で「生きる」ということに近い。「生きる」ということも、「語る」ということと同じように、「すでに起こったこと」と「これから何が起こるかかわからない」という偶発性とのあいだで形になっていくものだからである。

しかし、いわゆる「質的研究」の中でナラティブを扱う場合、現場のナラティブに対して一連の加工が施されることが通例であろう (Flick 1995, 邦訳フリック 2002第9章「データとしてのナラティブ」と比較)。質的研究において、ナラティブの現場は、「インタビュー」状況として規定され、多くの場合、機材を用いた「録音」が行なわれる。この「音声データ」から、ワープロを使った「文字変換 (逐語録の作成)」がなされる。次にこの「文字データ」はプリントアウトされた形で、もしくは「質的データ分析ソフト」を用いてコンピュータ内で、「コーディング」などの「分析」対象となる。この過程で何が失われるのであろうか。それはナラティブが語られ/聴かれる「今」の現場性である。ナラティブを、すでに形になった「データ」として扱うということは、ナラティブをその現場から脱文脈化するというに他ならない。質的研究者は、いつの間にかナラティブを現場外在的に扱ってしまうことになる。ナラティブが現場の関係性から生み出されるということを考えるとき、ナラティブから現場性を脱色することは、決して些細なことでは終わらないはずである。データとなってしまうナラティブからは、現場で体験された「これからどうなるのだろう」という生々しい臨場感とははや体験されない。

私自身がかつて癌の自然寛解をテーマとして行なった研究 (Oda 2001, 小田 2002) では、ナラティブを方法論上の中核的なコンセプトとして位置づけたが、その際、結果的には現場外在的な立場を取った。録音され、文字に変換された「データ」。それを分析する作業は、生きた魚を水から引き上げて解剖するようなものである。もちろん「分析=解剖」の作業には、研究上一定の意義がある。しかしそれによって「生きたナラティブ=魚」の姿を捉えることができないということも忘れてはならない。ともかく私は、自然寛解体験者たちのナラティブをデータとして扱い、その背後に物語のタイプを読み取ることを試み、そして実際に12名分の「ナラティブ・データ」を3つの「ナラティブ・タイプ」へと分類した。ではそれによって何がわかり、またわからなかったのか、さらに、それ以外にどんな質的なナラティブ研究の方向性があるのか。これらの問題への答えを明確にする余裕は、本稿にはない (この点について小田 2006を参照)。ここでは「現場性」という概念を手がかりとして、やや断片的な論考を書き留めるにとどめたい。

### III. 現場性とアクチュアリティ

日本語の「現場」という言葉には、複雑な意味が織り込まれている。それにはまず

当事者となって、ある事柄へ実践的に関与するというニュアンスがある。現場を「現」と「場」に分けてみると、そこには「現在」の時間性が色濃いと同時に、「場所性」も含まれている。この「場所性」は地理的に限定された、計量可能な客観空間のことでなく、より質的な、体験される状況としての意味が強い。人が現場を「身をもって」体験する。その言い回しには身体性の契機が暗示されている。さらに現場には理論的知識（「机上の空論」）だけでは捉えきることのできない複雑性と偶発性とがある。それは言い換えると、先行理解の修正を迫るような力として体験される。現場に立つてはじめてわかることがある。それに基づいて理論構築をすれば、それはボトムアップ的な理論化をするということである。それが可能になるのは現場に「関与／参与 participation」することによってである。「参与観察 participant observation」とは、この現場のもっている、既存の理論を超え出る力を実感することから始まった研究方法である。

この現場という日本語は英語に訳しにくい言葉である。辞書を引けば scene, site, spot, field などの訳語が載っているが、どれも上で挙げた豊かなニュアンスを含みこんだものではない。強いて言えば situation という概念には、現場という言葉に近い含意がありそうである。レイヴとウェンガーは Situated learning という著作を出している (Lave & Wenger 1991)。これは生徒が身をもってある状況の中に参入して、そこで行われていることを身につけていくというタイプの学習を理論化したものである。訳書では『状況に埋め込まれた学習』と原題が直訳されているが、『現場での学習』とすれば簡潔適確に原題の意を表せるように思われる。また現場性を英語では situatedness とすればそのニュアンスが比較的よく伝わるのではないか。

ナラティブにはさしあたり2つの現場性が含まれていると言える。1つはナラティブが語られる現場の性質。もう1つはナラティブがその対象とする出来事の現場性。この2つの現場性は、しかし、地理的に隔たった2つの場所のような関係にはない。ナラティブが語られている間、この2つの現場性は重なり合っている。話に興が乗っているときは、ナラティブ内の「今」が前面に出て体験される（「時間が経つのも忘れて話に聴き入った」）。しかしナラティブが中断された場合には、現在の時間に引き戻される。

リクールが言うように、プロット（筋）は「つなぐ役割」を持っている (Ricoeur 1981: 167)。プロットは出来事と出来事とをつなぐで、一つのストーリーへと仕立て上げる。だからリクールによればプロットとは時間性とナラティブ性との交点なので

ある。ナラティブの中の「今」は、プロットの働きによって、それまで語られた出来事との関係から生成する。

それではナラティブが語られる「今」はどのように生じているのであろうか。人生をナラティブ的に構成されたものと見るリクールに従えば、ナラティブが語られる「今」も、人生上の出来事をつなぎあわせるプロットと類似のものの働きによって生み出されたものということになる。

ナラティブの中の現場性と、ナラティブが語られる場の現場性との関係の問題は、今後さらに考察を加える必要がある。これは「ナラティブの力（物語の力）」を明らかにするための切り口ともなる問題であろう。ナラティブには、聴き手に体験したことのない出来事や、他者の体験を共有させる力がある。それはナラティブが「想像力」と深く関わるものだからである。想像力を通して、人間は別の現場を追体験する。

現場性の理解を助けとなる概念を木村敏が提起している。それは「リアリティ」と「アクチュアリティ」の対概念である（木村 1994：28-31）。木村によれば日本語の「現実」に対応するものとして、英語にはこの2つの言葉がある。ラテン語の「レスres」（事物）を語源とする「リアリティ」は、「私たちが勝手に作りだしたり操作したりすることのできない既成の現実を指す場合に用いられるのが原義である」（木村 1994：29）。これに対してラテン語の「アーキオー actio」（行為）に由来する「アクチュアリティ」は、「現在ただいまの時点で途絶えることなく進行している活動中の現実、（中略）それに関与している人が自分自身のアクティブな行動によって対処する以外ないような現実を指している」（29）。ここで研究のあり方にも関連する重要な指摘を木村は行なっている。「科学が対象としているのは完了形で固定できるリアリティだけ」である（30）。その一方で「私たちはつねに現在進行形で生きている」（31）。ということは出来事を客体化する研究の手法では、アクチュアルな現実を捉えることは原理的にできないのである。

ではどのようにすればアクチュアルな現実を研究の中で扱うことができるのか。それを可能にする言語の一つが、おそらくナラティブな言語なのである。木村はさきほどのリクールの論文を取り上げて、「（物語／ナラティブの）プロットは、物語の根底にあって、そこに生起するすべての出来事をその物語の必然的なエピソードとしてまとめあげ、物語に単一性と個別性の形態を与える」と述べている（木村 2005：126）。木村によればプロットがヴァーチャル（潜勢的）に働いて物語の個別性を生成することと、記憶が働いて人生の個別性（つまり「自己の自己性」）が生じることとは同

じ事態である。そうするとナラティブと人生とは相同的な形をしているということになる。つまりバイオグラフィー（バイオ＝人生，グラフィー＝描くこと）がナラティブの形式を取るのは必然なのである。

ナラティブの時間は線形ではない。過去から未来へと直線状に配列された時間は、むしろ事後的に作られたものである。ヴァイツゼッカーは生命（むしろ動詞形の「生きること」）を論じる中で、生きものの時間は客観的な時間軸の中に定位できないと指摘している（von Weizsäcker 1997）。「生命が時間のなかにあるのではなくて時間が生命のなかにあるということ、あるいはもっと正確に言うと、時間が生命の自己指定によって生成する」（木村訳 1995：30）。「生命は常に〈時間が橋渡しする現在〉であり、過去を未来とつなぐアクチュアリティ（行為的現在）である」（木村訳 1995：34）。この見方はナラティブの時間を捉える際にも有益である。ナラティブの時間は客観的な時間ではない。そのつどのアクチュアルな語る／聴くという実践において、「これまで」（過去）と「これから」（未来）という時間性が生成するのである。ここで上の木村の議論を踏まえれば、ナラティブの時間性は、プロットのヴァーチャルな働きにおいて生成するものだと付け加えることができるであろう。

#### IV. 他者の現場を現場とする

ナラティブ研究の現場とは、他者のナラティブと出会う現場である。現場の生きた他者と、データや症例として加工され、その他者性が脱色された他者とはまるで違っている。現場の他者は、未知の広がりをもった存在として研究者に経験される。ナラティブを聴くことを通して、確かにその他者を理解したという実感が得られることがある。しかしその理解は固定したものではない。完全なる理解が保証された他者は、現実には存在していない。現場の他者は、研究者の認知的・人格的枠組みを揺るがせ、そこに痕跡をとどめる力をもっている（小田 2006）。

エマニュエル・レヴィナスは『全体性と無限』（Lévinas 1961）の中で、他者のナラティブを研究する上で看過することのできない指摘を行っている。他者は、体系的な「全体性」に収まりきらない「無限」として経験される。他者と関わる現場において、「全体性」は成立しない。理解し、自己の認識枠組みの中に収まったと思うのもつかのま、他者はその理解を超え出て行く。他者を理解するということは、その他者が理解しきれない側面をもっているということを理解するということである。（この論法を「他者への想像力」というフレーズに応用すると、他者への想像力とは、他者



の生が自己の想像を超えたものであることを想像できる能力ということになる。)そこでレヴィナスは「他者を迎え入れること／歓待hospitalité」という概念を取り出す。「他者を迎え入れること」とは、他者が私を超越した「無限なもの」とみとめたうえで、その他者と関係を結ぶこと、現場を共有することである。もしくは自己の同一性に取まらない「他なるもの」を受け入れるということである。だから他者のナラティブを、自己の理解を超えたところもあるものとして受け入れることもまた「他者を迎え入れること」に他ならない。

念を押すまでもないことであろうが、レヴィナス的な他者の位置づけは、他者を理解不可能なものとして認識の埒外に追いやることでは全くない。そのような考え方は、実は「同」と全体性を固定したものとして捉える立場にとどまっているにすぎない。レヴィナスの思考は『全体性と無限』の後に、デリダというひとりの他者との交流を経て、「同」の中に「他」が刻まれていること、「自己」の根底にある「他者」の痕跡をみとめていくことへと展開していく。

あるナラティブは誰のナラティブなのであろうか。その語り手の所有物なのであろうか。その語り手の「同」の中に取まってしまう、一枚岩に成型されたものなのであろうか。この問題を根本的に追及したのが、ミハイル・バフチンである。『ドストエフスキーの詩学』(Bakhtin 1963)などの著作でバフチンは、「対話」をキーワードとした言語観を提起した。それによれば、調査や臨床の現場で出会われる他者のナラティブも、多様な他者との対話的關係性の中で生成したものだということになる。バフチンのいう他者とは、外在的な「他人」のことだけではない。バフチンの見方では、ある一人の人の意識が、すでに多様な他者の声によって構成されている。言い換えると、ある人の意識や心は、他者との関係性に向けて常に開かれている。ナラティブの現場とはつまり、多様な他者の声が響き渡るポリフォニックな関係の場である。

他者に関わることを、その方法論の主軸としてきたのは、社会・文化人類学の分野で発展してきたエスノグラフィーである。エスノグラフィーの大きな特徴は「文脈化 contextualizing」にある。それはある事象を、それが生起する場におけるものごとの関係性の中に位置づけていくという姿勢である。ナラティブを現場との関連で捉えていこうとすれば、必然的にエスノグラフィーの手法を取ることになる。ところがエスノグラフィーという手法も一枚岩ではないのであって、現場外在的な立場に立つものも多い。現場性・アクチュアリティを志向したエスノグラフィー、つまり「他者の現場を現場とする」エスノグラフィーを実践していく上で、例えばファビアン (Fabian

1983) が提起した「同時代性／時間共有性coevalness」の概念や、従来の人類学的方法を批判しつつ、「賭けられている／直面しているat stake」という性質に着目しながら体験／経験のエスノグラフィーを構想するクラインマンの論考 (Kleinman & Kleinman 1995) は有益な指針を与えてくれるであろう。これらはまさに現場・アクチュアルな状況に身を置いたエスノグラフィー研究の方向を示すものである。

### 引用文献

- 1) Bakhtin, M.: Problemy poetiki Dostoevskogo, Sovetskij pisatel', Moscow, 1963 (望月哲男・鈴木淳一訳：ドストエフスキーの詩学, 筑摩書房, 1995)
- 2) de Certeau, M.: Arts de Faire. Union générale d'éditions, Paris. 1974 (山田登世子訳：日常的実践のポイエティック, 国文社, 東京, 1987)
- 3) Fabian, J.: Time and the Other: How Anthropology Makes Its Object, Columbia University Press, New York, 1983
- 4) Flick, U.: Qualitative Forschung. Rowohlt, Reinbek, 1995 (小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳：質的研究入門, 春秋社, 東京, 2002)
- 5) 木村敏：心の病理を考える, 岩波書店, 東京, 1994
- 6) 木村敏：個別性のジレンマ, 関係としての自己, 108-134, みすず書房, 東京, 2005
- 7) Kleinman, A. & Kleinman, J.: Suffering and Its Professional Transformation: Toward and Ethnography of Interpersonal Experience. In "Writing at Margin: Discourse between Anthropology and Medicine." Kleinman, A., 95-119, University of California Press, Berkeley, Los Angeles, London, 1995
- 8) Lave, J. & Wenger, E.: Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation, Cambridge University Press, Cambridge, 1991 (佐伯胖訳：状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加, 産業図書, 1993)
- 9) Lévinas, E.: Totalité et Infini: Essai sur L'extériorité, Martinus Nijhoff, Dordrecht, 1961 (熊野純彦訳：全体性と無限〈上・下〉, 岩波書店, 東京, 2005・2006)
- 10) Oda, H.: Spontanremissionen bei Krebserkrankungen aus der Sicht des

Erlebenden. Beltz, Weinheim, 2001

- 11) 小田博志：質的研究におけるナラティブ，看護技術48(1)：89-94, 2002
- 12) 小田博志：ナラティブの断層について，ナラティブと医療（江口重幸，齋藤清三，野村直樹 編）49-69，金剛出版，東京，2006
- 13) Ricoeur, P.: Narrative Time,. In “ On Narrative”.ed Mitchell, W.J.T., 165-186, The University of Chicago Press, Chicago, London, 1981
- 14) Von Weizsäcker, V.: Gestalt und Zeit. In “Gesammelte Schriften” Band 4, 339-382, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1997 (1942) (木村敏訳：ゲシュタルトと時間，生命と主体，5-80，人文書院，京都)